Suttanipāta に於ける在家信者の宗教生活

金　漢　益

原始仏典最古層に属するとされる Sn. を通して最初期仏教時代に於ける在家信者の宗教生活を社会倫理，信，布施と功徳の三つの面から考察したい。

1. 「社会倫理」

在家信者の日常宗教生活は，三宝，或は二宝に帰依することから始まり（PTS. Sn. pp. 15-16, 25, 54-55, 86, 91, 101, 123），不殺生（Sn. No. 117, 121, 394, 400），不偷盗（Sn. 119, 121, 395），不妄語（Sn. 100, 126, 129, 131, 397, 400, 661），己が妻に満足せず，遊女に交わり，他人の妻に交わる（Sn. 108, 241），親族と友人の妻と交わる（Sn. 123），女に溺れる（Sn. 106, 814-817, 820, 821）行為を止めること，所謂不邪婬（Sn. 396）を戒しめる。そして，飲酒を慎しむべし（Sn. 106, 264, 398, 399, 400）といい，所謂 pañcasīla を常に守ることを勧める。そして父母に孝行を作し（Sn. 98, 124, 125, 262, 404），妻子を愛し護る（Sn. 262），悪人遠離善人親近し（Sn. 264），諸々の〈道の人〉に会い，適当な時によく聞法し（Sn. 266），施与と理法に適った行いをし（Sn. 263），予め功徳を積み（Sn. 260），自ら誓願を起して（Sn. 260），正法に従って得た財を以て父母を養い，正しい商売を行え。勤めに励んで怠ることなく暮している在家者は死後に自ら光を放つという名の神のもとに赴く（Sn. 404）。理に反した行いをした者は来世に地獄に堕ちる（Sn. 248, 64, 660, 661, 664-666）。

以上は当時のインドで普遍的に推奨されていた社会倫理徳目である。古代ヒンドゥー関係の文献にも同様な徳目が説かれている。つまり，仏教は当時の社会倫理を殆ど受け入れたことも考えられる。しかし，どうしても受け入れられぬ社会慣行もあったに相違ない。例えば，動物の血を供えるヤジュニヤは厳しく斥けられている。或は，カースト・ヴァルナ制度の人間の生れによる差別も認める事は無かった。従って，本経にみる在家信者の日常生活は，縁起説に基づく社会観，人間観（相互の）思いやり，平等などに照らしつつ，受け入れられるものは当時のインド一般の倫理を踏襲している。だからこそ中道であり，バランスのとれた宗教社会生活であったと考えられる。

2. saddhā (śraddhā)

Sn. の中には信者の日常生活には様々なその他の宗教観念や行為があった。先

ず信仰（saddhā-śraddhā）による生活を非常に重視した。即ち，「この世では信仰が人間の最上の富である」（Sn. 182），「信仰あり，在家の生活を営む人に誠実（sacca），真理（dhamma），堅固（dhiti），施与（cāga）という四種の徳があれば，彼は来世に至って憂える事がない」（Sn. 188），「信仰は種である」（Sn. 77），「信仰によって激流を渡る」（Sn. 184）ともいい，saddhā が積極的に人生の様々の苦悩を乗り越えるものであることを説いている。即ち，単なる倫理は所詮，倫理であるにとどまり，激流に比される人生の様々な危機は saddhā によってこそ，乗りきられ得ることが意識されている。従って，ここに重要なのはこの saddhā の内容でなければならぬ。ここで言う saddhā とは理法（Dhamma），教え（ajjhāpana）に対する信頼を意味するのであって，ある個人に対する狂熱的な服従を示すものではない。「柔和で，弁舌さわやかに，信ずることなく」（Sn. 853）というが注釈によると，これは「自ら体験したことがらを信じ，如何なる人をも信じない」（Pj. p. 549, *l.* 29）ことだという。また，例えば Buddhaghosa（A. D. 420 頃）によると，「自分の確めた事だけを信ずる。如何なる権威者をも信ぜず神々をさえも信じない」（Mah N. p. 235）と言い，合理的な考え方を示している。その反面，上記のように法の生き方を自らに課す信仰を説くことは，自灯明，法灯明の教えがここでも生きているのを窺わせる。つまり初期仏教の在家信者の宗教生活は極めて徹底した合理主義の立場を取っていたのが解る。いずれにしても，ブッダの意味する saddhā が，究極の目的に繋（つな）がるものであると言うことを知れば，saddhā の持つ意義は在家出家を通じて極めて重要なものであったと見ねばならない。

3. dāna と puñña

この様な合理主義的な在家信者の信仰の生活の中には dāna（布施）によって puñña（功徳）をつむことが含まれている。「功徳を求め，功徳を目指して供養する人は目的を達成するであろう」（Sn. 488）。puñña を目指す者は，心を清めて「祀りを行え」（Sn. 505–506），（施す前，中，後に心がたのしく，清らかで喜ばしいような）すぐれた祀（yañña）を行うならば「梵天界に生れる」（Sn. 509）とも言う。以上の例で判る様に Sn. は yañña を布施の意味で用いる。yañña は通常は血を伴う供犠であり，Sn. でも否定している（Sn. 81, 249）。しかし，茲では布施を行ずることを yañña と言うのであり，しかもその結果は死後天界に生れるという。即ち，第一には，yañña という当時のインドで普通に行なっている宗教儀礼を援用しつつ，換骨奪胎して仏教的に改釈している。第二にそれによって生天すると説く事は，これが悟りの level でなく，世俗的善である事を示している。当

時の仏教は在家信者に施・戒・生天論を説いている。「正しい方法で財を求め，正法によって得た財物を多くの人々に布施を行ずる人は多くの功徳が生ずる」(Sn. PTS, p. 87 *l*. 13-17)。それも「出家 Saṃgha に施したならば最上の果報をもたらす」(Sn. 569) と puñña によって生きるのが最高の生活であり，功徳を積む最高の対象は出家 Saṃgha であることを強調し，dāna は彼ら宗教生活の中でも最も重んじられている。

〈結語〉 以上の諸論拠から考え得るには在家信者の宗教的生き方には puñña, kamma, saṁsāra という Key-words で示され得る一連の「善行—功徳—生天」という体系と，信仰を持ちつつ真実を求めて生きる体系の両者が存している事を知る。信者は仏教の究極的価値を追求するものだが，実際には成就し難い理想であり，後者は現実的な生き方の指針であるが，必ずしも仏教の悟りと直結するものではない。つまり，puñña は善き行為 (Kusalakamma) をすることによって得られるものである。その結果，死後に良い世界に生れ変わるとされている。つまり輪廻転生思想が在家信者の宗教生活の中に公認され，定着している。良き世界とは，理論的には，仏の教えを聞く事との出来る人間の世界や天界を言うが，実際には天界が意味されている事は明らかである。その当時，誰もが信じていた生天して福楽を得るという考え方を，仏教の究極たる悟りに基づく高次の倫理生活の下部に組みこんで，現実に適合させたのであろう。これらの倫理徳目や布施の行為は他のインドの宗教にも見られるものである。ただそれが，ここでは，仏教の Saṃgha に向けられている点で仏教的であると言うに過ない。従って，倫理的な日常生活，信仰心，dāna を行じて puñña を積むという在家信者の宗教生活の基本は当時の生活文化の中で，広くその価値が認められ，定着していた一般的宗教観念である。即ち，飽までも民間信仰的な観念と行為を，仏教本来の教えに組み込んで，両方が平行して宗教生活が行じられていたと考えられる。従って茲でより重要な問題は，どの様にして，非仏教的なものが仏教文化の中に入り込み，どの様に仏教本来の要素と関わらしめられているかを見て行く事であろう。

（註記略）

（駒沢大学大学院）